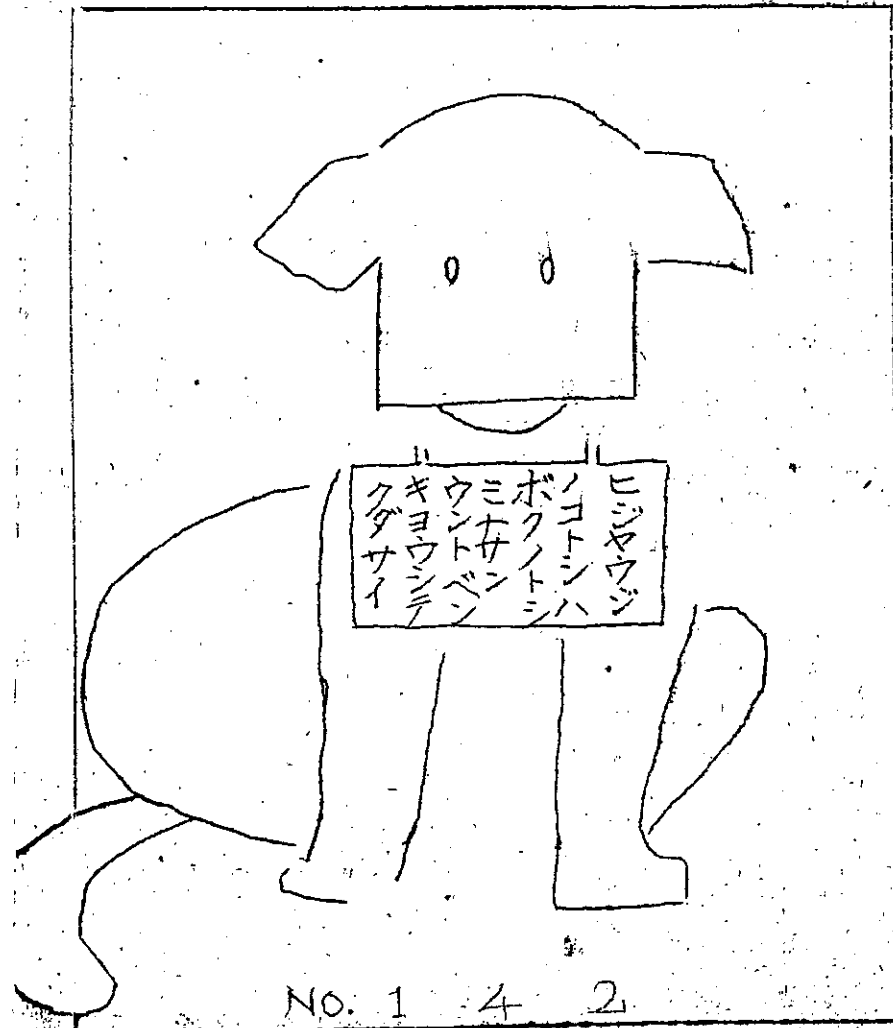


ナメシコ

1月号



一ネンノツヅリカタ

一ネンセイガハジメテツヅリカ
ヲツクリマシタ

ソレハソレハウレシサウナカホ
シテスバラシイコトヲカンガヘ
クノデセウオモヒダシフラヒ
シナガラ

「ゼンセイ、トテモオモシロイコト
カイタヨ」
トイデデアガタツヅリカタデ
スードニミンナノハ出セマセン
ノデダンダンニダシマス

△センサウノコトカガヤハジメ
ニホンノヒカウジウノトコロ

カラバクゲキキヘガバクダン
テキノデンチテキノバクダン
オトシマシタテキノバクダン
メキヤクキニテキノバクダン
サンシテニホンガユルシヤルト
ウノダニホンガユルシヤルト
チ出シテニホンタイホウヲ
ウトシマスニホンレデニホンハ
ンドンセンサウヲシマス

△ヒロシノコトヤホリエミコ
私ノウチニ赤ヤンガ生レマシタ
タエコトイヒマス。タエコガオト
ナリデオクワシヲモラタラ
ウチノヒロシガタエコノオク
ワシヲトテシマヒマシタ

ソレデ オカアサンガ ヒロシヲ
オコリ マシタ ソウシタラ ヒロシ
オヘンナカホヲ シマシタ ソレデ
オカアサン ニ シバラレ マシタ
サウシテ ゴメンナサイ ト イヒマ
シタ ソレデ ホドイテ ヤリマスト
私ヨ ブナマシタ

▲赤キンノコト ナカムラ ツトユ
ヨシヲ ハ 赤キン デス ヨシヲ
ガネハデ イルトキニ 私ガ ガウ
カラ カヘツテ キタ時ニ 赤キンガ
泣イテ 弁マシタ 私ガ イソイデ
カバンヲ オイテ ヨシヲキン
ヲ
ヨシヲキンハ イイ子ダカラネ
トアマシマシタ
ヨシヲキンハ スグ トマリマシタ

▲トウキウノコト アメミヤミエ
私ハ カグラザカ デ ナリマキヲ
タベマシタ ウヘノデ オヤルヲミ
マシタ コジキノ弁ルトコロデハ
トボボラ ミマシタ 私ハクマ
ト人ガスモウヲ シタ時 私ハ
泣キマシタ トウキウノ 私ノオウ
キハ コイシ川デス

▲オトウトノコト ミヤザキマスコ
私ノウチニ オトウト ガ 弁マス
オトウト ヲツレテオモテニク
オバンニ アヒマシタノデ オヂギ
ヲシマシタ オトウトハ アキラト
ユウナマヘ デス 私ハオトウト
大スキデス アキラトノリコハ私ガ
ガカウカラカヘルノカタノシ
ガカラ 私ハ イソイデオウマ

ヨシキ

兒主 孝三

ぼくは かきかたのとき 手にすみ
をつけます そのかはりに字もへた
です ぼくは どうしたら うまく
なるでせう 三年になつたら ぼく
は内で いっしやうけんめいに 左
うつて かきかたの先生になりたい
と思ひます それでも なれさう
にありません ぼくは どうして
へたでせう

金川 郁子

私のうちでは おばあさんが一ばん
さきに びやうきをしました そし
て そのあくるあさ私も びやうき
になりました そして うちで ぶ
じでおのほ おとうさんひとりです
えしてうちでは ごはんをたべませ
ん しんるのうちへ三どともたべに

行きます けふは うちで三人で

ごはんをたべました そのとき私は
どうしてかう水しくてたまりません
でした 私はどうしてうれしかつ
たでせう それはどうしてだか
わかりません それは たしかにう
ちで はじめたべたからうれしか
つたのでせう まだ おとうさんは
びやうきをしません おとうさんが
ぶじで びやうきを しなれば
よいと思つておます

橋本 重男

ぼくは うさぎを かあがつてい
ます おんなうさぎが こを七ひき
うみました もう少し ぞつかくな
りました そして ぐさも とつて
きてやります もうあす めがあき

ます あいたら ほかの かごにい
れえ やります ほう そのほかの
くろうさぎは ぞつかくなつておま
す しろうざは かあいいです

志村のぶ

このごろは かげが はやります
このうちにも かげで ぬておるう
ちが多いです 私も かげを ひき
ましたか こんないやなことには
しめてだと思ひました。うちでは
二人ひいただけであとものは い
ひあんばいには ひきませんでした。
かげが一ばんいやです。このごろは
だんだん すくなくなつたようです

三男三のつづり方

吉田亮二

このごろはつよい風があるので私たち
はうちであそんでおます。
この間、かくかうがやすみのとき、う
ちで私が本をよんでおると、おもてて
かせがふいて、あまどがかたん、
とうごくおどかきこえました。そくて
かせのためにはなやこ石が、がらすに
あたつて、かりやんとがらすのどか
したりしてたいへんつよい風でした。

野口晃

たうばん
横たりのたうばんは昨日だつた。
横はいつも水くみだ。時々こくばんふ
きこする。
昨日のごみすては茂義君だつた。ごん
どのとうばんのごみすては力太郎君だ

長田亮介

きのふのばん、ぬことぬずみのせん
えうを、ラヂオでやりました。とち
ゆうで、やがくへよびたきたから
行って、かへつてきてきました。だが
さつぱりでした。そして、ぬてしま
あうと、おもしろいといつて、おほ
あさんが、おこしたのも、しらす
ぬておました。そして、あさになつ
て、かあちゃんがおまへ、おまし
らうから、おばあさんが、あこして
も、おきなかつたぬ、だつて、ぼく
し、らなかつたよ

書道會

島野三男藏

志村は水はこびや、つくえをひつづ
つた。みのる志村は、はうきをもちつて
ぶら／＼してゐた。暗治志村は、はうき
ではいてゐた。フランクは、やうんで
ゐた。
僕は、このまへの本壇日にかき方をな
ほして、ちりびに行くと、ちりゆう、かう
ぼうりんにある水が、かさ／＼といつ
たので、こぼくて、たまりません。からか
けだして、いきましました。
まをすこし、じが、おないと、みえで、
井先生の家は、ひつそりして、おました。
なかへは、はいり、ました。きよし君と
よし君と二人おました。すこした
つと、石井先生が、きて、僕らの、かいて、き
たもの、を、なほして、下さいました。そ
の、うち、しげな、ほさんと、女の子、が、二
人、きて、三人とも、なほして、もちつて、か

りみんなてなぞごつこもしてかへりもした。

私はフリジヤ

高橋静子

私は今はなほたけにうえてあるフリジヤです。私はいつもひろいおはなばたけでいる。なほお花といつもたのしくあそんでおます。

あよい／＼どこかの人かきては私どもをきつていつてはとこのまのはなごしにさすのです。

私もこの間つれていかれてとこのまのたきしてしらないあをいながい。なんだかきみのおるいものといつしよにゐましたので。私はさびしくてしほれてしまひました。

夜

石津弘子

冬の夜はさみしいです。

私はおかあさんとてんりきやうへいく時。向ふの方をみます。あか

りが一つか二つはきつとあります。おうぎううの方にもあかりがみえます。又ほんせんなどがあるときは海がめかりでにぎやかです。

夜の空

夜の空を見て

見れば

ほしがたくさん

でておます

ほしの上には

お月様。

石津弘子

第四編 綴方



私は道ばたの小石です

笹口芳朗

道ばたの小石です。此の間まで私の下にダイヤモンドさんが居たのです。おど野郎がへりの百姓に拾はれていきました。私はいぢな人の手につかまれました。或時はイタヅラが私をつかんで人にぶつけてなかしました。或時は私を小鳥にぶつけましたので私は小鳥がかわいさうになつたのでからだをよけた。いいあんばいにあたりませんでした。

うしろのいさをあやん

藤滝瀧子

うしろのいさをあやんは早起きでお母さんが御飯をたきに起きると一しよに起

きて御飯をたくのを見て居ます。いさをちやんは皆にかわいがらぬます。人を見たと其の人のところへすぐ行く。おばあやんおぢあやんといつてすぐなつきます。いさをあやんは赤ん坊の時はやせて居ました。が今はとても太つて居してやべることは何でもしやべります。だからお父さんもお母さんもいさをはやすらうよりしやべれ。と言ひます。いさをあやんは今四つです。そして兵隊さんが大好きで家の前を兵隊さんが通るとすぐ兵隊さんにしつけいをします。

家の庭

石津岩子

私の家には庭があります。廣いといふ程でもありません。が菊の花やフリジヤの花があります。ナヤウチン草はも

う花が咲いておますナスの木や大根なども一日まじにのびて行きます。又私は穴を掘って草を種まきしようとしましたので、さうしたら穴の中からサトウキビのうまてあつたのが出て来ました。私はびっくりしておぼあさんにしかられると思つたから又入れて置きました。ネリの本は引越した時切つてしまひました。が、た芽が出て今ではもう大きくなつて居ます。フリジマの花が咲いたらお友達にあげたいつもりです。

此の頃

黒澤あさひ

此の頃はよく雨が降ります。今日も又風と雨が嵐の様に降りつづいて居ます。学校から歸つて来てよし子さんと今晩をしましたよし子さんは本を讀んでゐるし私は綴方を書いてゐる。前には犬

がねてゐる。その様子は如何にも、気が持たしくしてゐる。犬小屋はとも、大きな力で中へ入りませんやした。それからお父さんが歸つて来てむりに入れたので犬は仕方なしにノソノソ入つて行きました。

朝

石井美枝子

「ユケコッ子」とにはとりが鳴いた。まだ夜が明けない。妹はすやすや眠つてゐる。お父さんもお母さんもまだ起きない。桃だ、枕もとの置時計は相變らずカチカチと動いてゐる。早く朝になればよいかなと思つて、枕元を見た。お菓子が紙の上になつて残つてゐる。妹の口を知つておたがもう忘れてゐる。だらうと思つて一つは、ばつて日本少年をひらいた。おしげらしくして残りの一口も食べました。

尋五の綴方

皇太子殿下 金原くま

去る昭和八年の十二月二十三日午前六時三十九分待ちに待つた皇太子殿下が御誕生あらせられました。国民のうれしさはどんなであつたでせう。

書道展らん會

菊池秀行

つても皇太子殿下の話で一はいでしてそれから一週間たつて奉祝のちやうど行列がありました。其の時は村長さんが色々お話をしました。あまり聞えなごよく分りませんでした。此の間、親王殿下とありました。大へんにうらやましい事ではありませんか。

下度其時は學校の終業式でありました。順々にならんで式場に入る時、藤川先生の兄さんの家に国旗が出て居たので、みんな変だねと、口々に云つて居ました。いよいよ終業式が終つた時、校長先生が又壇に立つて、ニコニコして今日我が国で一番うれしい日だ。それは今日皇太子殿下がお生れになつた事ですとおつしやいました。どこへ行

一月七日は書道展らん會でした。私は朝御飯を食べるとすぐ學校にやつて来ました。そして真先に五年生の書ぞめがつけ、誰のが一等だか見やうと思つたが、いつまでたつても一等二等の札をはりつけません。私は外で誰が一等だかうかともねをおどらせて待つて居たが、つとして居られたいので、裏の行

や人が章一言しきりに話をして居てそれから頭が上らず學校へもすつ
ましたし、しばらくたつて私は又表にま行かれません。或晩の事です。その
はつて教室に入つて見ますと、良次君夜はどうしたか少しもねむれません
が一等で私が二等でした。私ばうれしした。まほりを見ると皆氣持よくねて居
さに次の室に入つて見ますと、裁判所です。僕は「あ、病氣つていやなものでな
の人が左手で書いた勅語が大へんうあ、どんなうまいものを食べてもまづ
まいと思ひました。私ほあの人のやうし、又こんなにねられな」とそん事
に上手にやり度いと思ひました。それを考へて居ました。その時ふと晝間のこ
から家にかへつて裁判所の人の書いた字の話を私に二等を取つた話をす
ると、寫眞屋のおいさんは一等を取るゆゑで、ひつくりして見ると先生がみまひ
やうになりなければいけないと言ひました。

病氣

佐々木勇

此の間の事です。學校からかへつて來ると、何だか頭がいたいので、ふとんをしいてねて居ました。ところが熱が出

先生と云ふものは有がたいものだと思ひました。

六十年生の戀

西村正一

朝は。眠い目をこすりながら、起つて洗面。冷たい水で顔を洗ふと、やうやく髪がほつりつた。いつものやうに梳木鏡を見廻ると、髪が三つ白い頭を冠せてゐた。其の隣には、レモンの花が昨日よりも二つ多く咲いてゐた。海岸に出で見ると、もう日は半分位山の向から顔を去りて居た。ふと見ると私の腰を叩いてゐたカヌーの光ばに誰か置いたのか青いはなをのぞりが一足、あんとせろへてあつた。もう二人な起きて来たのであらう。井口水を汲む音が方々で聞える。

父知らぬ弟を

石津俊秀

弟は父を知らない。お水は四年前、昭和五年五月四日丁度弟が二つ、の時死んでしまつた。弟は大きくなつてからどう思ふだらう。弟は可愛が、一で賞、人は憧れだけだ。僕は、今まで悪かつた。お水から弟を可愛がつてやう。さう決心した僕は、弟の寝顔を何時まで見守つて居る中に、知らず知らず涙が流れた。冬の夜は、一人一人と更けて行く。

流行性感冒

空家慶次郎

流行性感冒は一月からはやり始め、學校の生徒は五年生からうつて、休むべくなりなつた。學校の先生までが病氣になつて、お水から大勢病氣を

たどり風雲急をつかる太平洋もこの
あふるこびを祝してか、波静かだし
た。

元旦

延喜忍夫

しづしづと昭和九年の年はあけて来
た。僕は目をこすり、
扉を叩いて見る。
海は清れ、として風そよよと吹
き門松をさわ、として、
いと人をバタ、として、み、急波止
場にかけて行った。海はうねりを立
て魚までかうれしうにおまきまわ
つていた。



吾人の覚悟

齋藤 留

昭和九年を迎へた我等の覚悟はどうで
あらう。國は小さくとも世界五大強國
の一つである。
一九三四年、五年、六年、まさに我が
國の非常時中の非常時だ、何時どんな
危険が来なうとも限りぬ。我等筋への
國民は十分な覚悟を持たねばならぬ時
である。

隨筆

菊池美津

手習ひし去年の腕を書き初めに
高木 英江
競後会親しき友は敵になり。
菊池美津
清防の武初めと知うぬあわて着
又々に海王飲みたる父の藝

高ニの作文

昭和九年を迎へて 板東富乃

昭和八年も終へて希望に満ちた昭
和九年を迎へました。元旦家々の
門松は門松国旗が掲げられ町行く
へは改まつたせいで輝かしい
まいて新年の挨拶を交して行きま
す。何となく希望に満ちた朝です。
朝の様に私達の氣持ちも更つ
た。そして昭和九年をどうして過
すうかと考へた。

また来年 又来年で 年を取り
と言ふ様に年ばかり寄つて其一年
を無駄に過ぎない様にやうと考
へた。読方の時岡横山先生のお話
では我が國にとつて此の昭和九年
と云ふ年は非常時である。と云は
れた。しかし此の年は私達にとり大切

である。小學校を卒業し社会の人と
ならなければならぬ。

此の非常時の年だ、學んで私達は今直
の心を改めひきまゝにやめてオニの國民と
して我が國を脊負つて行つて恥ぢな
いだけの人間になる事を心掛けて進
まねばならぬと思ひます。

同

和田邦彦

僕等は夢の如くに昭和八年を終
へて昭和九年を迎へた。一口く年を
取つて僕等が成長して行くにつれて
此の中にも進歩発展して行きます。
僕等は進歩発展する此の大日本帝國
のオニの國民である。
昭和九年は非常に重大な年だ、さうで
ある。此の大事な年に成長して行く
僕等は、此の大事な年に成長して行く

が何時改められて来いもあはてない様
にして置かなければならぬ。

持丸由

昭和元年と云ふ年を迎へたのは、つ
先頃の追憶であります。今は
早や昭和九年を迎へました。此の年
こそは國家に於ても私達九千万の
國民に於ても実に重大な秋であり
ます。昭和の十年十一年には我が國
が吾界を舞台として正々堂々と重
要な諸問題を解決せねばならぬ。
時期ではありませんが、先づあの國
民怒りの種となつた軍縮公議の改
議、心ずや現日本は前の如き腰の弱
き外交ではありませぬから世界の
諸國が日本の軍備を押し様とする
事に対して異議を申上り我が國の
意見を述べようとするに相違ない。

専六

過失 一年 藝海 君子

今夜は夕飯を早くすませて自分の用事
をしようと思つて早くから夕飯の仕度
に取りかかつた。ところがどきどき
と、おまが私けとくだをさうさうさうまの
た。こまつたことに思つたと思つて母
につげしおやまのたところが大いそ母
は叱りはしませんで、私が私はんた
か気がとがむ胸がどきどきしておま
した。
夕飯がすんで井戸端に出た。教會堂の
屋根の上からまーい月が照りておる。
私ははつと、しまったまーいつまでか
月をながめておりました。今度は東先生
の婚禮だ。見に行き度いと思つたが夕
方の自分の調が氣になつて、見

さうなつたならば、種々の大花は散
るでせう。斯様な重大な事柄が幾つと
なり、に重なるつて来るのが、来年から来
々年にかけての間です。此の大切な
年を迎へるに當つて、基礎を堅固に築
くのは何時でせうか？
誠に昭和九年です。本年を吾等同胞の
一人でも夢の様に過したならば、國に
如何なる変化を来たすかわかりませ
ん。
其小故、今年には固き覺悟を抱いて日本
人の誰かが向はなけり、はならぬ年
であります。



に行かぬが、た。裁縫をさうして床に
就いたが夕方のことば思け水てなかな
かねつたおれませんで、
昭和九年 二月 三日

疾氣 一年 春元 トシ子

人と生れて一番いやなのは病氣です。
人はいくらおねげつても病氣にはどうす
る事も出来ません。
先月の廿日頃から父島にも悪い病氣が
流行つて来た。そのたお學校も一週間
休んでしまひました。私達も休まざり
た。私も病氣になりました。私の繁は一
人がおほくと又一人といふやうに、か
るがけつた床についでおます。まだみ
んちをとりまはせん。此頃は毎日小雨が

昭和九年一月第百四十二号
大村謙吉
編輯部

